

～はじめに～

このインタビューをお読みいただきありがとうございます。

まだまだ微力な私のインタビューではありますが、思いを存分に伝えさせていただきました。ぜひ最後まで読んでいただけたら幸いです。

これから新たな道を求められている方や
新たな一歩を踏み出したいと思っている方へ

「ビジョンプロデューサー」という職業への思い

○「ビジョンプロデューサー」という今の仕事に対して誇り

今、私はとても楽しい日々を過ごさせて貰っています。「幸せか」と聞かれると「幸せ」と答えることができます。それは、教員だった時に会えなかった多くの方に会うことができているからです。そのおかげで今は、新鮮な気付きが非常に多く、そのことをとても楽しいと感じています。

ただ今まで人生をかけて取り組んできた「教師」という職も、私は非常に好きだったんですよ。だから、いろんな人に会った時に、進路指導にどう活かせるかという視線で見えてしまうのですが、本当に仕事って世の中にたくさんあるということに改めて気付きました。

私の場合は、「人を成長させたい」とか「努力して成長することに関わりたい」という思いで教師という仕事に就いたのですが、そういう仕事は教師以外にもあるんだとようやく分かったんです。

また、会った人に対して、その人は「なんでこの仕事をしているんだろう？」という視点で見えていくと非常に勉強になっています。

そう気付いた時に、今の職業である「ビジョンプロデューサー」としてのやりたい道がみつかりました。

○「ビジョンプロデューサー」という肩書きに込めた思い

「目標」「夢」だけではなく、それを含んだ上で、それらがその人にとってどんな価値があるのか、周りの人達にとってどんな価値があるのか、ということを含んだ言葉として「ビジョン」という言葉を使っています。そして、この「ビジョン」をそのクライアントの方にあわせて作り上げるお手伝いをしたいと思っています。

○目指していた「日本一」を捨ててまで、「ビジョンプロデューサー」という職に

方向転換した理由

教師という「職」を辞めると決めた時点では、陸上部を「日本一」にできる絶対的な確信まではまだありませんでした。「日本一」を実現してから次へ、ということも何度も何度も考えたんですが、それよりも新たなこの「ビジョンプロデューサー」という仕事に挑戦したいという気持ちが強かったんです。

ただ、やはり元は「教師」でしたので「教育」を大切に思う気持ちは全然変わっていません。だからこそ、いろんなことを経験していつかまた学校で教えてみたいという思いは持っています。

「ビジョン」の発見

○教師時代に嬉しかったベスト 3

1つ目は、初めて全国大会に陸上部を導いた時のことです。その時は、それまでと違い「行く」と決めていたからです。それまでは、今振り返れば、実は「行けたらいいな」ぐらいにしか思っていませんでした。全国大会に出ている他校をみて、「あんな選手がいていいな」とかしか考えていなかったんです。

その時はそのために何かをしていたかというとしていなかったんです。

けれども、「決めた」結果として、初めて全国大会の出場が決まった時は、嬉しいよりも先に、何か「ホッ」としましたね。そして、全国大会当日、会場に立った時には鳥肌が立ったことを覚えています。

「決める」ということが大きなポイントになると、この時に確信しました。「決める」ということで、もの凄く成長できるし、ゴールに近付くことができるというのを知れたのが大きかったですね。

2つ目は、担任を持つようになってからの校内の合唱コンクールです。

1回優勝を逃した以外は、優勝という成績を残してきました。

ポイントは音楽の先生じゃなかったことがよかったと思います。

専門的なことは、中学生くらいになるとちゃんと習っている生徒がいるのでその生徒をリーダーにして任せました。

だから、私の役割は「みんなの取り組みは、本当に感動を与えられるのか？それで後悔しないのか？」と常に生徒達に問い続けることでした。

初めは、練習の中にルールを作り、しっかりと守らせるというステップを踏んだ後に、こうやって問い続けるという指導に変えていくという手法を採っていました。

そうした指導で、生徒達が一生懸命練習する様子を見ることができると、私は本当に感動するんですね。

ただ単純に、生徒達が一生懸命歌っていることが好きだったんです。

その結果、生徒達が一生懸命に合唱に取り組む姿を保護者の方に喜んでもらうことができました。

そして、3つ目は、不登校の生徒が、卒業式にちゃんと、来てくれたことですね。教師としては来て欲しいという思いが凄くあります。だけど、その時の私では力不足で学校に来られない生徒がいました。

1校目の時ですが、「卒業式には来て欲しい」とずっとアプローチし続けてきた生徒が最後に来てくれたんです。

結局、卒業式本番には来ることができなかったのですが、「卒業証書を渡したいので終わってからなら来るか」というとなんとか前向きになってくれて、「行きたい」と言ってくれたんです。

だから、式の本番が終わってから、クラスの生徒達に

「彼は、来れないかもしれないけど、今から彼を迎えに行くから一度帰ってできるなら再び集まって欲しい」と頼んだんです。

そうすると、ほとんどの生徒が集まってくれましてね。

彼を迎えに行った時に、「みんな待っているけど、どうする？無理なら帰ってもらうけど。」と確認したんですが、少し考えてから「行く」と決意してくれて。

クラスの生徒達が「体育館でやろう」と提案し、準備してくれて体育館で私のクラスだけで彼のための卒業式を行ったんです。

その帰り道、「来てどうだった？」と聞いた時に「よかった」と言ってくれたんです。それはもちろん、そんなクラスの雰囲気も嬉しかったですね。

○『陸上部の教科書』を作るまでの生徒は、周りの学校にも影響を与えてくれた

教えていた中学校の女子陸上部では、新入生が分かりやすいように、上級生達が入部してくる後輩のために、役割分担をして『陸上部の教科書』を4年前に作ったというエピソードがあります。

生徒に『陸上部の教科書』を作ることを考えていると伝えたところ、「私たちがやってみます」と、各パートのリーダー達が積極的に声を上げてくれ、出来上がったものです。原則、生徒達はシーズンオフに一人一人が項目一つ一つを担当して、土曜日の練習前にそんなパートのリーダーが集まったり、各自家に持って帰ったりして最終的には、ほとんど直すところがないくらい、素晴らしい『陸上部の教科書』を作ってくれました。

それ以来、この『陸上部の教科書』を新入部員に渡してきました。

そして、そんな生徒達は、周りの学校に影響を与えるまでになってくれたんです。

名古屋市だけでやっている陸上の大会のだらしなさに初めは、私は非常に残念な思いをしていました。だから、最初は自分のチームだけは、そんなふうにはしないと決めて指導をしてきました。

当初から、私の方針は、「陸上部を通じて、周りを元気にする、勇気付ける、明るくする」でした。そのための振る舞い、態度を自分の生徒たちにも求めてきました。

だから、その指導が実を結び、閉会式でも表彰台のセンターに自分の生徒達が真っ先に2列でビシッと並び、そして、とても態度良く話を聞いてくれたんです。

でもあるときから、「自分たちだけじゃいけない」—そんな風に思うようになりまして、「このムードがどんどん広がって行くように」そんな思いで活動するようになりました。そうすると、いつの頃からか他校もまねしてくれるようになりまして、表彰台の前を取る競争が始まりましたね。また、応援も他校は適当に行っていたのですが、私の生徒達はしっかりまとまって応援してくれて、それも他校がまねしてくれるようになったんです。そのころから、凄く良い、さわやかな大会に最後の方はなってきたな、と思えたことが嬉しかったですね。このように市の大会までも変えることができたことが嬉しかったんです。だから、進学させた先の高校の先生からは、「先生のところの生徒は、いてくれるだけで凄く助かるわ」とまで言ってもらえるようになったんです。また、恩師には「井坂が作るチームは、凄く気持ちが良い。」と言われるようにもなりました。

○出会いが与えるもの

教師時代「なんか違う、なんか違う」と悩んでいた時に本屋で偶然、原田隆史先生の書かれた「本気の教育でなければ変わらない」という本に出会いました。

その時、何を求めていたかという「教師塾」（原田隆史先生が現役教師と教師を目指している学生のための無償の塾）という本気の人が集まる場で、そんな中に入って本気で語り合える仲間・同志が欲しかったんです。

それは、自分がやってきたことが間違っていないと、この原田先生の本で勇気付けられたからなんです。

また、言葉ですが、「言葉」との出会いということ言えば、人生で影響を受けた一言があるんです。それは、小学校高学年の時にゲームの説明をしたんです。その時に「なんか、井坂に教えてもらおうと分かりやすいよね。教えるのが上手いね」と言われたことなんです。

それ以来、そうなんだと漠然と意識はしてきたんですが、中学生の時に所属していた陸上部で、自分がアドバイスしていた後輩がもの凄く結果を出してくれたんです。その時に教えるのが得意なのかな、と中学生の時に気付いたんです。また、大学でもアドバイスしていた後輩がどんどん成長してくれて、教える面白さに徐々に気付いていったんです。

皆さん、きつとこういう「出会い」というかきっかけがあると思うんですよね。

「ビジョンプロデューサー」のこれからの「ビジョン」

○「ビジョンプロデューサー」としてこれから

指導すればより成長する可能性のある中学生ではなくて、私は大人を対象とした人材教育を専門に行おうとしています。今、お会いしている方々は、やりたいことを多く持って、会っていても楽しいし、エネルギーを貰える方がほとんどです。エネルギーを貰えるのは大人じゃなくてもそうだと思うんです。

いつか、私の周りには「ビジョン」を持って本当に頑張っている大人達に中学生とか高校生達に触れさせて上げたい。頑張っている大人達の「思い」に中学生が触れる機会も作りたい、と考えています。そうやって触れることが重要だと思っているんです。

そういう場を提供できたら面白いだろうな、と考えています。

このことによって、生徒たちが未来に向けて前向きになれるんですよ。

まず現在は、大人になりたいと思っている生徒があまり多くないんです。私の場合は「早く次にいきたい、早く次にいきたい」と考えていました。なぜなら私の家庭は、金銭面で苦しかったため、現実より未来を見るしかなかったんです。

しかし、今の生徒たちは、未来に対して、目標を持ちにくい、というのが中学校の現場で実際感じてきたことです。不況だとは言われながらも、実際、生徒達は食べていくのがやっとという生徒はおらず、ゲームもあれば、携帯も持っています。

それぐらい、まだ恵まれた環境で育ってきた生徒達が、何を未来に期待するのか、というところが非常に難しいんです。

だからこそ、そうした社会状況にいる生徒たちに、夢・目標を持たせるためにどうすればいいかと言うと、そこには「価値」が必要だと思っています。社会が成長している時は、社会全体に共通した、車を持ちたいとか「価値観」がありました。しかし、今は個人の「価値」が多様化しています。だから、こんな前向きに頑張れる魅力的な価値観もあるんだとか、を生徒達だけではなく大人にも知って貰いたいんです。

ここがこれから私のやりたい上述したようなことにつながってくるんですよ。

○「ビジョンプロデューサー」としての強み

私は小さい時に経済的に本当に苦しかったんです。けれどもそんな悪い環境でも、今までやってこれました。

そんな人生観から、私の一番の強みは、「誰でも絶対にできるよ」と人を本当に信じることができる点だと思っています。「この人は無理だろう、この生徒は無理だろう」とかは思わないんです。誰を見ても、必ず成長する、と信じています。

ただ、思い描いたものがその時点で100%達成できるかは別ですけども、必ず成長しているのは間違いありません。たとえそれが今回は達成できなかったとしても、10年、20年経った時に違う形で気が付いたら達成していることってあると思うんです。だから、無謀だと思われる夢・目標を描いている場合もありますが、そんな時でも相手が本気であるなら私は信じます。

こんな話があるんですよ。新種の魚を発見した魚類学者の「さかなくん」の話なんです。彼は、行きたい大学の受験に失敗し、望みは叶いませんでした。しかし、好きな魚の研究に没頭してきた結果、

「自分は学生としてはこの学校に行けなかったけれども、今、教える立場で志望した大学に来て嬉しい」と言えるまでに達したんです。

その瞬間はもしかしたら叶わないかもしれないけれど、努力し続けたことで、夢が違う形で実現したっていう例だと思うんですよ。このように気が付いたら成長してると思うんですよ。

目標を持って、夢を持って続けていけば誰しものが、必ずいろんな形で成就するんだと思うんですよ。

人材教育の方針

○コーチング方針

私はクライアントの方が考えられた「ビジョン」が叶うように導いていくことが私のコーチングの方針だと考えています。

○いろいろな価値観を受け入れることは怖い！この解決策は？

「人は変化することを恐れる」という言葉を知った時にもの凄く府に落ちたんですよ。周りの方を見ていて歯痒い時があるんです。

「なんでもっと頑張らないんだらう？」とか「こんなことを知っているなら、そのようにすればいいじゃないか？」とってしまうことがあったんです。

では、なぜそうなるのかと言いますと、人って変化することを恐れてしまうんですよ。もちろん私もそうです。チャンスを頂いた時に一瞬躊躇しますよね。その時に、「あっ、いいな」と思う自分と「忙しくなるよな」とか「責任も重くなるよな」「失敗したらどうしよう」と変化した時の不安感を抱く自分がいるんですよ。ただここで分かることがあるんですよ。どうしたらいいのか、ということです。

○どうしても変化させることができないものが、その人の「軸」

それは、「変化させてもよい軸」と「変化させてはいけない軸」があるということを理解しておくことなんです。まず、「変化させてはいけない」ものがその人の軸というか、理念になると思うんですよ。このことに気付いて以降、「変化させてもよい軸」を変化させるようにしてきました。しかし、私も数年前までは、この2つがごちゃごちゃで分けた

れていなかったんです。ごちゃごちゃだと不安感の方が圧倒的に強くなるんです。知らないことはやはり不安だからです。

けれども、分けるようにしてからは、もやもやとした不安感を作り出していることを教えてくれる方に会うようにしてその不安感を解消しましたね。勇気も貰えるんですよ。ここを整理することが重要なんだと思います。

○「出来そうだ」感（統制感）を身に付けてもらいたい

この「出来そうだ」感（統制感）がもの凄く大事だと思うんですよ。

私が教えていた陸上部は凄く部員が多かったんです。運動が苦手な生徒もたくさんいて。

彼女達は「自分もここなら活躍できるかも」と思って集まってくれたんです。

初めはみんな心配があるんですけど、私たちの陸上部は、「練習は時間制だから1本しかできなくてもいいよ。1回しかできなくてもいいよ」「できなかつたら先輩がフォローするよ」と指導するんです。

だからみんなから置いていかれる心配もありませんし、これをきちんと続けていけば、

「3年後先輩達のように活躍できるよ」と指導してあげれば「それでいけるんだ」と思っ

て続けてくれるんですよ。「誰でもできる」「私にもできる」というのは本当に大事だと思うんです。

「ビジョン」を実現するために

○「ビジョン」を実現するためには家族の協力が必要。そんな家族を作るためには？

この「ビジョンプロデューサー」という仕事に転職する時に、最後には家族から「言い出したら変えない人だから」と言われました。しかし、最初、言い出した時は反対されました。しかも、生活のかかった仕事ですから、反対されるのが当たり前です。

その時には、本気度を試されている、と考えたらどうでしょうか。

絶対に言い出したら変えない人という認識を植え付けなければいいのです。

そのためには、普段の生活の中で、例えば食事の店を選ぶ時にある料理を決めたら絶対に変えないとか、です。そんな小さなことでも、言い出したら変えないということが積み重なれば、どんなことでも「言い出したら変えない人だ」というイメージにつながるんです。

家族には本当に感謝しています。大切な家族の為にもこれからも全力で頑張っていきたいと思っています。最後までお読みいただきありがとうございました！

井坂直人